

小川博三著

記念碑都市

書評者 松井達夫*

筆者は本書の著者とは面識はない。しかし「交通計画」、「都市計画」の著者であることは知っていた。しかもその都市計画の序文に、石川栄耀氏との対話によって影響された由を読んで、その人柄や傾向を偲んでいた次第である。石川さんは、直接その下で筆者も働いたことがあるが、人間の集団としての都市に強い関心を持っておられて、市民の交歓の場としての都心とか、広場とか、盛り場とかについて精力を注がれていた。著者との対話の内容については知らないが、本書を読んで著者が都市計画家として基本的な認識を正しく持っておられることを思うのである。毎日新聞の書評子が6月はじめに本書を紹介するのに、著者が土木家であることを、やや意外そうに書いているのは苦笑ものであった。

記念碑都市というのは、英語でいえば monumental town というところであろう。monument の第一の意義は「記念すべきもの」で必ずしも「いしぶみ」に限らないが、西洋の都市は石がおもな材料だから記念碑都市というのは、うまい表現というべきだろう。それは、古い時代の人々の生活や、活動や、はたまたその思想の記念碑であり、またそれがよく保存されているのである。そして何ごとにもせよ明日を開くことに苦慮するものは、昨日の中から教訓を読みとろうとする。「記念碑都市」は単なる愛玩と懐旧の対象ではないのである。

本書は第1部のケーススタディーと第2部の本質の検討からなっている(付録として墓碑の研究があるが、ここでは省かして頂く)。ケーススタディーには、著者が親しく訪ねた西欧諸国の20の都市を取り上げているが、そのほかにも解説されているものも少なくない。筆者は、まず著者の熱心な遍歴行脚かぶとに甲をぬがなければならない。それらの都市は、2000年から数百年の歴史を有し、百万都市から、国土の辺隅にあって、なみの旅行者の立寄りがたい小都市もある。王侯や大司教の意途の発露であるものから、中世市民の築き上げた「己のが町」古くは Roman town の跡づけられるものがある。そして著者のいうとおり、それぞれに個性があり、その発生

からその変遷に、その構造から lay-out にそれぞれの理由がある。その中から著者は、特に日本人の眼から、何か普遍的なものを把み取るようとしている。

第2部は、かくして到達した著者の見解を述べる。その一は防衛である。歴史的考察から、著者が現代都市の防衛に思い煩らうのは理由のあることである。しかし、われわれは自然力と公害に対する防衛に追われている。その二は、都市の核心である。バビロンの象徴はバベルの塔であったし、古代ギリシャの都市の核心はアクロポリスであった。中世以降の市民は己のが市の目じるしとして長年かかって大聖堂を建てた。われわれの都市のそれは、超高層建などのジャングルだろうか。第三には、接触と速度と題し、著者は市民の相互接触の場としての広場、その古代ギリシア以来の伝統を述べ、それがいかに自動車に侵略されているかを指摘している。自動車と歩行者の問題はわが国のものでもある。第四は、空間の選択と題するが、車以前につくられた多くの記念碑都市が、せまい街路と enclose された広場によって、いかに巧みにひとつの system を構成しているかが説かれている。最後のものは、立地と変遷と題されていて、土地と水と交通という3つの立地因子によっていかに都市が作られ、それが長い歳月をへて、いかに風土の中に安定して来たったかが考察されている。これらの諸題目については筆者も関心を持ち、著者の意見について同感するものが多い。記念碑都市は多数本書で紹介されたが、これに止るものではない。読者は、歴史の流れの中で、何故に都市が発生し、いかにそれが造り上げられ、どうその使命を果し、そして現在につながっているかを改めて考えさせられることである。そして、古く美しいものの保存もさることながら、古い都市の在り方から、現代に役立つものを探りたいものである。また、著者のいうように、何を破壊し、何を残すべきかを、よく考えねばならない。

本書は、わが国にとってはユニークな作品と思う。著者の労を多としたい。記述は厳格な論文論というよりも、もっとリラックスしたもので、多数の図面や写真がわれわれを楽しませてくれる。いくつかの点で著者の見解に首をかしげることもあったが、短文ゆえに、また専門外のことに涉ることもあるゆえに、論議をさけた。一つだけ、明らかに著者の思い違いと思われることは、ローテンブルクが今度の戦争で破壊をまぬかれたことである。また一つだけ読者に奨めたいことは、それぞれの時代の市民の生活を書いたものを併読することである。本書の魅力が倍加するだろう。

* 正会員 工博 早大教授 理工学部土木工学科